

繪傳に現はれたる善導大師

—高祖表現の一考察—

井川定慶

◇ 緒 言 ◇

高祖善導大師千二百五十年遠忌を遡ふるに當り、其記念事業の隨一に大師の繪傳を作製するの議成り傳記の詳覈、科段類別、語句の推敲を終へて、愈よ畫家に囑して繪傳に表現せられんとするに當り、大師に着せ申すべき衣服や如何にすべきかといふ問題は甚深の考慮を要するところであつた。

尙ほ淨土開宗の論據を高祖、元祖の二祖夢中對面においてゐる。開宗年時を選擇集述作の年（源流章の説）、承安四年（眞宗系に多い説）、承安五年も春、或は三月十四日に定めることに就て論攷する事は今の場合さし控へるとしても、二祖對面の物語は、今の繪傳作製に關連し居り、且つ今や淨土宗史上から省略することが出来なくなり、而して本宗傳法上に於ては殊に重大視されてゐる。さほど重大なる物語ならば、最初から一定不變であつたらうか、又元祖の靈感した善導大師のみ姿は、忠實に傳へられてゐるのであらうか。諸傳は區々であり、繪畫は多種多様である。

唐の山僧善導は如何に、我が高祖としての善導大師は如何に表示すべきであらう。

◇ 唐僧善導 ◇

唐の高僧としての善導の姿を偲ぶべきものは百萬遍知恩寺藏の單身立像（國寶）と嵯峨二尊院藏五祖の御影、鎌倉光明寺藏淨土五祖繪卷（國寶嘉元第三奥書あり）であるが、既に發表せる如く大師滅後五六百年代の作品であつて當時のものは一つも遺されてゐない。

「白道の聖者」教學週報昭和三・三・七日發行の拙稿參照。「善導大師の研究」二五二頁に淨土五祖像渡來を俊乘房が仁安二年歸朝の砌り請來と確定せるも考ふる處あり、「白道の聖者」二四一頁に改訂せる事を付記す。光明寺藏五祖繪卷につきては「國寶全集」第四輯參照。

隨て確たる史的價值ある肖像畫はない譯である。終南山の住僧で道宣と同時代であつたから、銀鈎のある南山衣を着してゐることは認めるべきであらうが、どの程度迄、南山律と關係ありしか。

表示の像は聚落教化か禮誦、聽講かによつて三衣の中でも僧伽梨、鬱多羅僧と區分すべきであり、其の常用染色は果して百萬遍藏單身像の如きか五祖像の如きか、如何であつたらう。唐代袈裟の遺物として傳ふる正倉院御物の九領と空海請來の東寺秘藏の惠果阿闍梨着用衣、眞言七祖像（國寶）着用衣等も考證すべきであつて、其等の所論は別にまとめて一稿をなすこととして、今は我が淨土宗高祖としての善導大師に就て述べやう。（「歴史と地理」第二十一卷第四號拙稿「淨土宗二祖曼荼羅」參照）

◇ 半金色の出據 ◇

半金色の聖者を善導大師の代名詞に用ふるが、其は多く法然上人行狀畫圖卷第七の二祖對面の文に據

つてゐるのである。然らば上半身は墨染でなければならぬ。國寶の原圖は鬚髯を備へたる黒衣の山僧の腰より下金色なる姿を描き出されてゐる。

増上寺藏殘缺二卷本の「法然上人傳」(淨全卷十七 一〇九頁)にも「上は墨染、下は金色にて半金色の衣服なり」とありて國寶の原圖を拜見するに然か描かれて居る。知恩院藏の國寶「法然聖人繪」と同一系統なることを確めたる神戸川崎男爵家藏の釋弘願與書「法然聖人繪」(史林第十二卷 第四號參照)の第二卷にも「上は墨染下は金色の衣服なり」とあつて繪亦此に應じてゐる(口繪第一 圖參照)。拾遺古德傳繪詞卷第三も「かみはすみそめしものは金色の衣服なり」とあるから、同一原本より分派せると考へる本朝祖師傳記繪詞の卷第一(淨全第十七 五八頁)に「唐善導もすそよりしもは阿彌陀如來の御裝束にて現じ」とある上半身は墨染衣の文句が脱せられたものであらう。

醍醐本法然上人傳記(法然上人全 集追加三頁)の「從_レ腰上者如_ニ常人_一」とあるは漢語燈錄所收『夢感聖相記』の「腰上半身尋常僧相」と同じく當時の僧風と道元禪師の逸話と想ひ合せて是も亦墨染と解すべきである。

されば傳法用二祖對面の善導、並に其れより脱出せる佛壇用高祖像にして、腰より下半金色なるものは上半身は須らく墨染衣にて表現すべきであつて、色衣を着用せしむべきではない。墨衣にして信機信法の傳法の妙釋も活きるのであるまいか。

若し其れ半金色像にして上半身に金色燦然たる法衣を表現せば、宗祖夢定中の靈感のみ姿に非らず、

唐の高貴なる僧善導大師といふ崇敬觀念と二祖對面の物語とを交錯せる異式の高祖像となる。

◇ 光明大師辨攷 ◇

善導入京以前より存し、三階教團の放光佛の因縁より名づけられた光明寺を、善導自身が念佛して口より光明を出し、高宗其の口出光明に感じて勅額を賜つたと迄敷衍し、更に光明大師と尊稱するやうに物語は進轉したので、研究の結果は從來の光明大師の傳説を削除すべきである。然し「口出光明」といふことは、篤信者に相應しいことで僧傳に屢々顯はれることでもあるから、鑽仰すべき善導大師傳から強いて口出光明を除かなくとも宜からう。

たゞ二祖對面の善導表現に際し、往々見うくる口出光明と、光明中出現の佛體を描出すべきか否かを今茲で吟味しやうといふのである。

宗祖に口傳する場面の高祖善導に口出光明は否なりといふ説がある。上に引く二祖對面の文相には現はれてゐない。一往尤であるけれども其等の依憑すべき繪圖は皆口より佛體を出してゐる。是れ口傳の所詮は稱名念佛なりといふ表示と解し、半金色聖者の口出光明は差支へなしと私考す。然し、源と光明大師の訛傳と関連せること勿論なり。(口繪三圖共参照されし)

古來、善導表示には口出三尊、後善導と稱さる少康法師表示には口出十體佛として二者の區分とせるも一往の繪畫上の約束に止るに過ぎず。

◆ 二祖對面と開宗 ◆

奇蹟とか靈感は宗教に附隨してゐる。史學上に於ては一物語として取扱ふ。

遺弟源智が輯録と推定せらるる法然上人傳記(醍醐本)には、「於_レ自身出離_ニ己_ニ思定畢_テ、爲_ニ他人_一雖_レ欲_レ弘_レ之時機難_キ叶_ヒ故_ニ、煩_テ而眼_ニ夢_中」云々と二祖對面の物語を述べて念佛弘通の決心をしたと記して直ちに淨土一宗別立といつてゐない。

同じ遺弟牝空が、宗祖滅後廿五年に當る嘉禎三年に選述せる傳法流通繪(逸本今の本朝祖帥傳記繪詞の原本)より分流せると覺はしき釋弘願與書の「法然聖人繪」や拾遺古德傳繪詞には、同じ内容の二祖對面の物語を述べて、科段を別にして淨土開宗の年時を明記してゐる。

旭蓮社澄圓が獅子伏象論に引く法然上人傳は嘗て佛敎學雜誌(第三卷第七號)にも論せし如く、逸本になつてゐる信瑞述の所謂一卷傳と思はるゝが、其には同内容の二祖對面あり、續いて淨土興立(承安四年春とはなつてゐるが)の記事あり、而して建曆元年正月洛陽東山大谷寺方丈に善導和尚再び化來して源空へ親授することを記してゐる。此の上人傳果して私考する如くば、法孫信瑞が滅後三十年より五十年の間の原作となり、二祖對面、開宗、大谷寺の連絡(勅傳の説)へ進展せしめる過渡の説である。

滅後百年、舜昌法印撰述と傳へ、完成は尙ほ時代を下ぐべき法然上人行狀畫圖には、卷第六に善導の觀經疏の文を再三引用して淨土一宗別立の因由と承安五年春開宗と明記しておきて、卷第七には二祖對面

の物語を述ぶるも、前掲諸傳と内容を異にして、地所を明記せずして一往地勢を述べて高僧の出現は、既に弘むる専修念佛が貴きがゆへに來れるなりとなつてゐる。これ前諸傳に於ける、二祖對面と建曆元年の傳法とを合糅せるものにして、漠然ながらも記せる地勢は大谷寺を暗示し、後世の傳法に眞葛ヶ原大谷寺(今の知恩院)と云ふ所に近よらしめてゐる。

夢感聖相記は宗祖の法語とは申せ、了慧が滅後六十二年に漢語燈錄に輯録するところにして其記事は今の行狀書圖の二祖對面の物語の先驅をなしてゐることも、物語の移動發展史上興味深いものである。

尙ほ行狀書圖の二祖對面に至つては夢の善導の影像を畫工乘臺に圖せしめた記事があり、唐朝請來の面像に違はずと付記するところ、是れ當時禪家に尊ぶ面授相承と頂相護持との二つの事實に對して、淨土宗に缺く處を此物語にて補ひ血脈相承を鼓吹して禪家に對立せしめんとする意圖と解すべきである。

増上寺藏の國寶殘缺二卷の法然上人傳「紫雲覆日本國事」の條を圖せる二祖對面圖は宗祖が畫工に空中出現の口出光明の半金色の僧を圖繪せしめて居り(口繪圖版 第二參照)、其本文(淨全卷十七 一〇九頁)と、今の行狀書圖とを對照して讀む時、法義相承を云はんとして出せる物語たることを確認するであらう。

◇ 此遺より流通へ ◇

二祖對面は、宗祖化他煩悶に當りて、善導出現は弘法決心の表示で、恰かも善導の觀經疏の例を藉りて論ずれば二河白道の譬喩に於ける釋尊の此遺の聲を聞いて決然白道へ歩を進めし行者の心的狀態を示

せるものにはあらざるか。幾變遷を経て法然上人行狀畫圖に至つて纏められた二祖對面の物語を、更に今の傳法の二祖對面に迄發展せしめたる物語は、觀經疏流通分の證定靈驗に當らずや。「毎夜夢中常有一僧而來指授玄義科文」の物語に於ける阿彌陀が一僧として來現し、今の二祖對面に尋常僧相として善導が出現し腰下は如來相なる、これ史學史上にいふ移動傳説に非ずして何ぞや。

◇ 結 語 ◇

唐僧としての山僧善導の研究、淨土宗高祖としての半金色聖者善導大師の研究とは別に考ふべきで混同すべきでない。史上の人物としての研究と、宗教上鑽仰敬慕史上の事實變遷としての研究と、學としての發表とを混同して輕々に批議すべきでもなからう。「ヒストリイ」は「苟くも探究して獲得された知識」を意味してゐる。(昭和三・二・二四稿)

口 繪 解 說

第一圖 知恩院所藏(國寶)法然聖人繪と同類なる神戸男爵川崎武之助氏藏である。二祖對面の本文も圖も勅傳と異つてゐる。

第二圖 増上寺藏(國寶)法然上人繪では教化してゐることが佛意に契ふかと煩ひて夢み、半金色聖者を直ちに畫工に畫かしてゐる處を一圖におさめぬ妙。

第三圖 知恩院藏・鑑査狀付法然上人七幅繪傳の對面は圖案的に見えて興趣深し。尙ほ口出光明の有無に注目されし。